
遠くに近くへ

ヒビキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遠くに近くへ

【Nコード】
N7845J

【作者名】
ヒビキ

【あらすじ】
ちよつと一護↓夏梨風味な日常話。

（前書き）

注意！

一護↓夏梨な話です。

元々サイトにあったものを多少マイルドに変えてアップしました。
タイトルも変えています。

そついうのが苦手な方は超逃げてください。

夏梨たんがいればどうでもよくね？という方はどうぞ。

前触れもなく扉が開いた。

「一兄、辞書貸して」

「夏梨……ノックくらいしろ」

「別に一兄が裸でもあたしは困らないけど？」

「俺が困るんだよ」

幸い、服は着ていたが、あと少し早ければ着替えの真っ最中だ。危ういことこの上ない。

夏梨はというと、からからと笑って、乙女のように恥らわないでよと、たぶん、恐らく、貶された。

「お前、他の奴の前でそんなこと言ってんじゃねえだろうな」

いささか不安に思っ、念のため、と言いつつしながら訊いてみた。そんなわけないでしょ」

またひとつ、評価が下がった、様な気がする。そんな目で見られた。

年頃の娘の考えることは良く分からないな、と心の中でだけ呟く。なのに。

「一兄、ヒゲみたいなこと考えるなよ」

読まれてる。その上親父みたいとは。

暴言だ。

横暴だ。

言葉の暴力だ。

「事実じゃん」

兄を凹ませた当の本人はいたってさらりと言いつつ放った。ああもう。

「夏梨、」

短い前置きの直後に一護の手が夏梨の首根っこ掴む。

「わ！やあっ」

「こらっ。大人しくしろっ」

じたばた足掻く夏梨の抵抗をもともせず引き寄せて抱え込む。腕の中に閉じ込めたまま頭をぐりぐりと押す。

痛くはないはずだが変なツボにあたってこそばゆいような、むずむずするような感じがするらしく、夏梨は力の抜けた声で鳴く。

痛みやらには強いがこういう刺激にはとことん弱いらしく大抵このツボを押すと夏梨は大人しくなる。

「やだっやめ」

「ほー。じゃあちゃんといいなさいっ」

「ごめ、ごめんてばっ。許してえ」

同時にぱっと手を離すと床にへばりこんだ。

「い、一兄、ひどいじゃんか」

「夏梨のほうがひどいだろ。」

もう一回いくか？」

「いいっ。もういいっ」

普段強気の夏梨がこんなことでへたりこむのは、何度やってもやりがいがある。

「あーもう。なんでこんなとこ押されるだけでダメになるかな。」

絶対だれにも知られないようにしとかないと……」

他の誰も、知らないのか。

そりゃあ夏梨が頭なんて触らせることまずないだろうし。

「ひとり、楽しそうでよかったねえ？」

嫌味たっぷりの言葉に正気に返る。

ちよっと優越感感じてたのはバレてないだろうか。

「ところで一兄、辞書」

「あ、ああ。ほら」

「どーも。明日でいい？」

「構わねーよ」

「じゃ、借りてく。」

ありがとう」

にこりと笑って。

去っていく姿を思い返す。

一体いつまで。

他愛ない優越感を持ち続けることができるのかと。
そう思いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7845j/>

遠くに近くへ

2010年10月17日03時15分発行